

(様式)

令和2年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立別所認定こども園
-----	--------------

1 学校教育目標	(1) 心も身体も元気な子 (2) 友達を大切に作るやさしい子 (3) よく聞き、よく考え自分の思いがはっきり言える子
----------	---

2 本年度の重点目標	(1) 身近な自然の中でのびのびと活動し、動植物の世話をする機会を多くもち、直接体験・感動体験を通して、豊かな感性を育てる。 (2) 保育教諭の資質向上に努める。 (3) 新型コロナウイルス感染症対策を生活の根底に位置付け、安心した生活ができるように、様々な工夫を園全体で考える。
------------	--

3 自己評価結果(達成状況) 【 A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
教育課程・指導	・ 幼保連携型認定こども園教育要領に応じた指導方法の工夫をする ・ 幼児期に育てたい10の姿を意識した教育保育の計画、実行、アプローチカリキュラムの作成(小学校への接続) ・ 教師との信頼関係の構築 ・ 食育の推進	①各クラスで個人支援案を作成し、一人ひとりの発達に即した支援のあり方を職員間で話し合い、共通理解しながら支援にあたった。また、多面的に幼児理解ができるように、各クラス1名のピックアップ児を他のクラスの職員が関わったこと、感じたことを記し(記録カード)、みんなで子どもを見ていこうとする姿勢を大切にしたい。 ②子どもの発達に即した望ましい環境構成を考え、3～5歳児職員と一緒に「戸外遊び計画」を作成した。その計画をもとに実践した後、0～5歳の全職員でカンファレンスを行い、今後に向けて修正していくこともできた。各クラスで発達に合わせた環境構成を「BEFORE AFTER」カードで具体的に記録し、園全体で共有することができ、今後に生かす資料になった。 ③小学校への接続(10の姿)アプローチカリキュラムについては、年度末に作成する予定である。 ④教師と子どもとの信頼関係の構築においては、「子どもを毎日曇りのないきれいな目で見ること」「子どものしていることを良いこととして、まず見ることができるようになること」「子どもの話をよく聞くこと」など、基本的なことではあるが、確かな力として積み上げつつある。 ⑤食育については、年間指導計画を作成し、様々な野菜などを実際に育て、収穫の喜びを感じることができた。また、食べることも心も身体も育てることを、エプロンシアターや紙芝居、絵本などで子どもに伝えた。	A	①今年度全職員で記録カード作成や個人支援案作成、戸外遊び計画作成に取り組み始めたので、今年度の反省をもとに、より子どもの内面を理解し、教育・保育の質の向上に努めるように努力したい。 ②次年度は年度初めより、「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」について、職員が日常の保育の中で10の姿への視点をもって、保育にのぞめるように心がけたい。 ③引き続き様々な場面での共通理解ができるように、保育カンファレンスを行っていく。
道徳・人権教育	・ 経験や体験を通しての道徳性や規範意識の芽生えの育成 ・ 身近な自然や動植物に親しみ、命を大切にする心の育成(一鉢栽培の実施など) ・ 絵本の読み聞かせの実施及び絵本貸し出しの実施	①日々の遊びの中で、良いこと悪いこと、嫌だったこと、嬉しかったことなど…子どもが感じたことを素直に出せるように支援しながら、相手の気持ちに気づくことができるように丁寧に聞いたり、受け止めたりしながら、子ども自らの気づきを大切にしたい。 ②実体験を大切に、十分に身近な自然との触れ合うことができる時間、空間を確保し、子ども自らが命の大切さを感じられるように努めた。今年度は、より近い存在として感じられるように一鉢栽培を始め、自分のヒマワリ、二十日大根を種から育てたことは、大きな体験となり心が充実した。また、コスモスの種まき、サツマイモの苗植え、小松菜、ミカンの栽培など、五感を通して教育・保育内容が展開できるように、様々な植物と出会い、そこに集まる虫たちとの出会いを意図的に計画し、心を豊かにすることができた。 ③人権研修会にはできるだけ多くの職員が参加できるように努力した。また、必ず研修報告を書き、他の職員に報告する機会をもった。 ④日々の保育の中で人権感覚を磨くことができるように、ケース会議を行い、職員間で感覚の共有ができるように努力した。 ⑤新型コロナウイルス感染症予防のために、マスク、手洗い、消毒などを習慣化し、自分も相手も大切に行動を考えるようになった。	A	①今後も、日々の遊びの中で実際に起きた出来事をもとに、子どもが感じたことを友だちと互いに思い合える時間を十分にもち、丁寧な支援を心掛ける。 ②自然との触れ合いについては、職員も含めて来年度はより多くの虫や自然との出会いができるように、環境を整え、その中で職員も子どもと共感する姿がふえるように取り組みたい。 ③今年度一鉢栽培を始め、子どもたちが自分の花や野菜に心を込めてかかわっていた。今後も一鉢栽培を実施するクラスが増え、良い経験ができるようにしていきたい。 ④人権研修では、今後も自己研鑽に励み、職員の人権感覚を磨きたい。
特別支援教育	・ 支援が必要な園児の情報共有 ・ 一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援 ・ 家庭や専門機関との連携・参観指導(にじいろ、ゆらんこ、ると、各病院 など)	①一人ひとりに応じた支援のあり方について、職員間で話し合ったり、新型コロナウイルス感染症予防のため回数は少なかったが講師を招き公開保育を行ったりしながら、指導助言を受け実践に生かした。 ②発達支援センターにじいろ、ゆらんこ、ルート、健康増進課、教育センターなどの関係機関と連携を密にし、こども園全体で個々の支援のあり方、個別支援計画の作成をし、支援のあり方について共通理解した。 ③園外の研修では療育連絡会、市内の連絡会など、教師のスキルを高める研修をできる限り重ねた。	B	①今後も関係諸機関との連携を深め、研修を重ねながら、職員のスキルアップをはかる。 ②今年度は、園外の研修がしにくい状況であったが、機会をとらえて積極的に研修会に参加できるようにし、より丁寧な報告伝達ができるように、努力する。
家庭・地域との連携	・ 信頼される園づくり(保護者の思いを汲み取るなど) ・ 家庭や地域の方々への情報発信と受信 ・ 子どもの心の育ちや発達を伝える工夫	①保護者の子育て等の支援では、常に悩みや相談を丁寧に聞き、悩みの共有をしながら、必要に応じて時には関係諸機関につないでいけるように努めた。 ②園だよりを地域の公民館、JAみりの等に置いていただき、発信の幅を広げた。また、園内での子どもの姿や日常的な子どもの姿にたくさんの学びがあることを伝えられるように記述した。 ③ホワイトボードに、頻繁に園生活の様子を写真で展示したり、遊びの過程からの学びを表示したりした。 ④クラスだよりでは、昨年度よりも発行回数を増やし、継続的に園の生活を発信することができ、保護者から喜びの声を聞くことができた。 ⑤ホームページは、過去4年間で20000アクセスだったが、今年度4月からの1年間で20000アクセスを超え、多くの発信を行い、また反響もあった。 ⑥地域の公民館のロビー展参加(2回)、町民文化祭参加、隣保館文化祭参加、市役所プロムナード、図書館に作品展示など、コロナ禍ではあったが、子どもの作品を公開し育ちを伝えた。・地域の老人クラブさんとの花植え交流、しゅうらく苑、サンピラ三木への手紙交流などを行い、高齢の方への思いを巡らす良い機会となった。	A	①保護者の方の相談には、心を込めて今後も丁寧に話を聞き、しっかりと信頼関係を築くことをより心がける。 ②今後もこども園の保育内容を地域の方に知っていただく方法の工夫や、ホームページ、クラスだよりの質の向上などを心がけたい。そのためには、教師の子どもに対する内面理解と育ちの足跡を見て取ることが大切であるので、より研鑽していく必要がある。 ③また、情報発信と共に地域とつながっていけるように、受信も来年度は力を入れたい。
健康・安全教育 防災教育・コロナ対策	・ 例年の避難訓練の実施の継続 ・ 新型コロナ感染症予防のために3密、ソーシャルディスタンスなどの対策を行うなど	①避難訓練の実施では、例年決まった時間に実施していたが、今年度は様々な時間に実施し、より実際に即した訓練ができるようにした。その結果、早出、遅出の職員も避難訓練に参加することができ、実践的な訓練ができるようになった。子どもたちは、しっかりと話を聞くことができ、とても真剣に取り組み、防災についての学びが積み重なっている。職員の反省についても、その日のうちに記録し、全職員で共有し今後に生かすことができた。 ②新型コロナウイルス感染症対策については、園生活すべての中で努力し続けている。初めは模索しつつも徐々に様々な工夫を行うことができるようになった。具体的には日々の生活の中(特に、給食時、午睡時など)や、行事の持ち方(2、3日間開催、完全入れ替え制など)について特に何度も考え、工夫した。その中で、いつも保護者の方が快く協力してくださったことがありがたかった。子どもたちには発達に応じて、感染症についての話をわかりやすく伝えていった。 ③園児の家族が手作りマスクを何度も全園児にプレゼントして下さったことも、園児が喜んでマスクをつける習慣がついた大きな力となった。	A	①今年度は、設定時間を様々なにするなど、より実際に即した避難訓練ができたので、今後も様々な状況に応じて臨機応変に対応できるように、実践していきたい。 ②不審者対応では、課題が多かったので、もう少し回数を増やして考え合う機会をつくりたい。 ③新型コロナウイルス感染症対策については、今後も様々な状況の変化があるので、子どもの命を大切にすることを第1に考え、柔軟に対応していきたい。
教職員の研修・資質向上	・ 保護者対応、職員の仕事への意識向上 ・ 公開保育の実施 ・ 全員での保育カンファレンス ・ 園内研修会の充実など	①保護者対応については、常に保護者の気持ちを聞くことに努めるように何度も職員会で研修した。多忙な保護者の生活を思い描きながら、職員の一時的な「こうしてほしい」という思いを伝えることは保護者に受け入れてもらえないどころか、逆に信頼関係が築けないことに職員が気づくように話し合った。長い目で子どもの成長を見ながら保護者と共に寄り添いながら保育を進めていけるように心がけた。 ②感染症対策を行い、可能な時期に公開保育を行い、春川先生より指導を受けることができ、具体的な実践の中で指導を仰いだ。 ③コロナ禍のため、研修の持ち方の工夫を行い実践した。具体的には「あたりまえを見直したら保育はもっと良くなる」などの本(年間3回実施)を全員で読むこと、じんけんビデオの鑑賞、必要に応じて保育のポイントの資料配布などを行った。	B	①保護者対応については、基本的に信頼関係を築くことから今後も努力し、相手の気持ちや状況を受けとめ、誠実に対応することを心がける。 ②コロナ禍がおさまった後、公開保育、園内研修会で実際に指導を仰ぐことにより、職員のスキルアップを目指したい。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

自己評価は適切である。コロナ禍の中、工夫して多くの実践を行い、その結果を冷静に分析し、改善の方策を明確に示している。積極的な取組と達成への意欲が感じられる。
--

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	・ 評価Aは、妥当である。今年度から、子どもの「記録カード」「個人支援案」などの作成を始めたことは評価できる。今後も個人差を大切に、一人ひとりの発達に合わせた実践を続けていただけることを願います。
・ 評価Aは、妥当である。命を大切にする心の育成の取組として、「一鉢栽培」を始めたことは評価できる。人権研修は、継続して実施することが大切であるので、今後も今年度同様、全職員が参加できるように工夫を重ねていただきたい。	
・ 自己評価はBになっているが、Aの方が妥当ではないか。関係機関と連携をし、個別支援案を作成し、適切な支援を行っており評価できる。園外への研修が少なかったのは、新型コロナウイルス感染症の影響であるので、Aの方が妥当である。	
・ 評価Aは、妥当である。こども園だよりを定期的に発行し、公民館などでの、情報発信、ロビー展や文化祭での作品展示を行うことで、地域との連携を図っていることは評価できる。また、ホームページのアクセス数も今年度は急激に増加し、積極的に情報発信していることも評価できる。	
・ 評価Aは、妥当である。特に早出・遅出の職員も避難訓練に参加し、より実践的な避難訓練ができたことは評価できる。また、園児、保護者の新型コロナウイルス感染症対策として、午睡などの日々の生活や行事の持ち方を工夫して実施していることは評価できる。	
・ 評価Bは、Aに近いBである。新型コロナウイルス禍ではあったが、感染症対策を講じて研修を行っていることは評価できる。ただ職員の資質向上につなげるまでは時間がかかり、研修の余地があるとこども園は評価している。今後のさらなる努力を期待している。	